

遼西地方における青銅器文化の形成

甲 元 真 之

はじめに

3. 中国北部地域における青銅短剣の生成

1. 最近の中国研究者の見解
2. 西周初期の青銅器群

おわりに

論文要旨

中国長城以北の地域についての従来の青銅器文化研究は、この地方を南シベリアから続く広大な草原地帯と一括して、中国中原地域と対置する形で進められてきた。1970年代以降、南シベリアのカラスク文化の研究の進展によって、中国北方地域と共に通する青銅器遺物の年代が、中国よりも下降することが明らかにされるとともに、中原対北方との関係に研究の重点が移されてきた。その結果、中国北方の青銅器文化に独自性をもたせて、中原地帯とパラレルに変化していくとしたみる説と、中国の殷周文化の強い影響下に独特な青銅器文化が形成されたとみる説に収斂されてきた。

燕山山脈以北に分布する青銅器のなかで、年代的に最も遡上し、その性格が明確なものは、召公奭を中心とした燕関係の人々によって形成された青銅器の埋納遺跡であり、これらは遼西一帯に広く分布し、一部は遼河を超えて広がりをみせている。これら青銅器の埋納遺跡には、青銅彝器を主体とするものと、青銅製武器を中心として営まれるものとがあるが、いずれも召氏一族に関係するものであり、紀元前11世紀における燕の中国北方への進出を物語る。

燕と関係する青銅製武器のなかには2型式の銅剣がある。ひとつは、従来は殷代と想定されていた曲柄式銅剣があり、その祖型は殷代にみられる刀子と考えられる。他のひとつは石刃を挿入した骨製短剣から展開したものである。年代的には後者が古く、青銅器の製作技術が北方へ伝播して作られたのに対して、前者は中国北方地域に燕が進出したおりに、有柄式銅剣をもつ集団との対峙から生み出されたものと考定される。

このようにみると中国北方地域にみられる、一見殷的な文化と融合したように独自の青銅器文化も、召公奭が支配下に殷の大規模な勢力を保持していたことに起因することが考えられ、中国中原地域の影響下に遼西地方の青銅器文化を形成されたことが分かる。